

## 学問研究に資する英語教育に向けて

滝 沢 直 宏

---

### 〈要 旨〉

大学での英語教育は、学問研究に資するものでなくてはならない。名古屋大学において平成 21 年度に導入される新しいカリキュラムは、この当然の大前提を明示的に宣言している点に特徴がある。具体的には、(1) 電子教材を用いた自学自習による学習量の絶対的増加、(2) Placement Test によるコース分け、(3) 基礎力不足の学生に対する「英語 (サバイバル)」授業の開設、(4) パラグラフ・リーディング/ライティングの向上を目指した授業展開などにまとめられる。

本稿は、これらの特徴に言及しつつ、筆者が個人的に考える学問研究に資する英語教育とはどのようなものであるかを述べる。具体的には、新カリキュラムが謳っているテキストのマクロ構造に対して注意を払うことの重要性に加え、「読めば分かるが自分では書けない表現」の意識的収集が論文産出にも重要であることを指摘する。最後に、コーパス (電子化された大規模な言語資料) を活用した「使える英語」の拡張法にも言及する。

---

### 1. 新カリキュラムの導入

大学での英語教育は、広義あるいは狭義の学問研究に直接的あるいは間接的に資するものでなければならない。その点を蔑ろにしたなら、そもそも大学の英語教育ではあり得ない。従来も、それを暗黙の了解として進められてきたと信じているが、平成 21 年度に導入されるカリキュラムは、この言わずもがなの大前提を明示的に宣言している点に特徴がある。Academic English と謳っている点がそれである。(このカリキュラムは、「全学教育検討WG」(主査: 杉山寛行理事 (教育担当)) から平成 20 年 3 月に出された報告書「英語教育の改善について—国際基準の英語力を目指して—」に

基づいている。以下、「新カリキュラム」と称する。)

本稿では、この新カリキュラムの内容に言及しつつ、筆者が考える学問研究に資する英語教育とはどのようなものであるかを述べていく。なお、筆者は、平成 20 年度の名古屋大学・教養教育院・英語科の主任をつとめているが、本稿の内容は、新カリキュラムの枠組みに関する部分以外、全て筆者の個人的意見である。というのも、新カリキュラムにおいても、細部までの統一はなされていないので、細部について語ろうとするとどうしても個人的見解の披瀝にならざるを得ないからである。

## 2. 学習量の絶対的増加のための電子教材の導入

高校の英語の授業数と比べて大学におけるそれは、英語関連の分野を専門とする一部の学生を除けば、明らかに減少する。したがって、学生自身が不断の努力をしなければ、高校卒業時点での英語力を維持することは難しく、英語力が低下することさえあり得る。随分、前のことになるが、カー (E. H. Carr) の *What is History?* (『歴史とは何か』) を名古屋大学の 2 年生 (文系) の授業で読んだことがあるが、開始早々に苦情が来た。「こんな難しい英文、1 年生でも読めませんよ」と。この言葉は薄々感じていた危惧を明確に認識させてくれた。入学時点の方が、英語力が高いというわけである。このような状態だと、学問研究を行うのに十分な英語力のレベルにまで英語力を高めることは、なかなか難しい。英語力の低下を食い止め、むしろ大学生に相応しいレベルにまで向上させるためには、授業に真剣に取り組むことはもとよりだが、授業外での自学自習が不可欠である。後者の整備が、従来はひよっとすると疎かにされていたかもしれない。

ではどうするのだが、現在は、電子教材の発達が目覚しく、それを使った学習の環境も以前とは比較にならないほど整備されてきている。電子教材による自習を義務化すれば、多くても週に 2 コマという英語授業を補う有効な手段となることが見込まれるのである。そこで、新カリキュラムでは電子教材を使った課外学習が義務として課されることとなった。新カリキュラムの一つの大きな柱は、電子教材を用いた自学自習の制度化であり、それによる学習量の絶対的増加である。

### 3. Placement Test によるコース分け

効果的な授業を行うには、実力によるコース分けが有効である。そこで、新カリキュラムでは、新生は入学するとすぐに TOEFL-ITP と Criterion という試験を受験し、TOEFL-ITP の点を使って A, B, C のコースに分けられることになる。Placement Test の導入によって、学生本人のみならず教員の側も実力を客観的に把握できるという利点がある。客観的な基準に基づいて習熟度別のコース編成を行うことも、新カリキュラムの大きな柱の一つである。TOEFL-ITP と Criterion は、翌年の 1 月にも再度、受験するので、学生にとって英語力の伸びを客観化できる機会となる。

TOEFL を使うことには異論もありうるだろう。そのような試験で測れる英語力は、ごく一部の（しかも技能的な）側面だけであるという意見もある。無論、TOEFL の得点が良ければ、それで十分というものではない。TOEFL の高得点は、学術書の正確な理解と正確な産出を保証するものでも必ずしもないからである。しかし、アメリカなどの大学・大学院が留学生の受け入れ可否を判定する際の重要な資料として TOEFL の得点が用いられていることを思えば、この試験で高得点を取ることが、大学で研究していくための英語力の一面を測っていることは否定できないだろう。

急いで付け加えるが、TOEFL-ITP および Criterion という試験を実施するからといって、その得点を向上させること自体を新カリキュラムの目標として設定しているわけではない。目標は、あくまで学術的な英語の正確な読み書き能力の基礎力を付け、また学術的なプレゼンテーション（国際会議などにおける口頭発表）に資する能力を向上させることにある。その力を付ける過程で、TOEFL-ITP および Criterion の点が向上することも同時に期待できるが、それはあくまで付随的な効果と見なすべきだろう。

### 4. 「英語（サバイバル）」授業による底上げ

文法は、言語理解・産出の基本である。建物に喩えれば、骨格部分である。英語であれ何語であれ、また学術目的であれそれ以外の目的であれ、およそ文を正しく理解し正しく産出するには、文の構造を司る「文法」が（暗黙のうちにてあれ）きちんと身につけていなければならない。これがいい加減でも済まされるのは、条件反射的な挨拶の言葉程度であり、それはそもそも大学の英語教育が目指すべきものではない。

自分の経験を語って恐縮だが、昭和から平成に元号が変わった年の夏、筆者はニューヨークの大学でラテン語に浸る10週間を過ごした。前半の5週間で分厚い文法書を終え、6週目のはじめに7時間にわたる試験を受ける。後半の5週間は、本格的な古典（キケロ、ヴェルギリウス、ホラティウスなど）の訳読（ラテン語から英語への翻訳）である。その10週間の感想を問われれば、「文法は素晴らしい」の一言に尽きる。5週間、無味乾燥な文法規則を古典語独特の奇妙な（？）文法用語と共に習うと、6週目には古代ローマの古典が何とか読めるようになる。「文法翻訳法」という名の（時に悪名高き）教授法は、本来は、ギリシャ・ラテンの古典講読が平易にできるようにするためにあった。正に Grammar is glamorous.なのであり、この教授法のお蔭で古典が読めるようになった者は多数いるはずである。

新カリキュラムでは、文法をはじめとする基礎力が基準に達していないと判断される学生（Placement TestでCコースの判定を受けた学生）は、「英語（サバイバル）」という名称の授業を余分に受講することとなる。これにより文法をはじめとする基礎的知識を必要最低限の水準にまで引き上げ、学術的な論文の正確な理解と産出のための土台作りが行われることになる。ここで扱う内容は全ての基礎であるから、この授業に合格しない限りは、2年生の授業を履修することはできない仕組みになっている。（仮に受講したとしても、基礎力が不足しているのだから単位取得には至らないはずだ、という了解のもとでの受講制限である。）2年生の授業を履修することなく大学を卒業することはできないので、「英語（サバイバル）」の合格は正に大学で「生き残る」ために絶対必要な要件として位置づけられたことになる。そして、その合格には一定の基準が設けられ、そのことで最低限の英語力の保証もなされることになる。（この品質保証の必要性は、冒頭に述べた報告書「英語教育の改善について—国際基準の英語力を目指して—」における「名古屋大学における英語教育の品質保証が行われなければならない」という主張に由来する。）

勿論、途中で躓いた学生には、再試験の機会など再挑戦の道を用意しているし、また新設予定の Academic English 支援室が積極的に補助する体制もとられることになっている。英文は見るのも嫌だという学生あるいは入試で英語以外の外国語を選択した学生には苦痛を伴うカリキュラムになってしまうのが懸念されるが、それは、学問の世界で英語が必要とされているという現状のためである。

## 5. マクロ的な文章理解

さて、学術論文をはじめとする内容のある文章を正確に理解・産出するためには、基本的文法を身に付けた上に、首尾一貫して書かれた英文のパラグラフの構成について習熟していく必要がある。これは、いわば英文のマクロ的な理解・産出のための基礎であり、これを「英語（基礎）」（1年前期）の授業で行うことになる。この授業は、学術的な英文を読むための文字通り基礎となるべき内容である。単文レベルでの英文解釈に問題がなくても、文章全体として何を言おうとしているのかを理解するマクロ的理解力を持たない限り、学術論文の理解・産出には至り得ない。そのためには、パラグラフそしてエッセイの構造を理解する必要があるわけである。「英語（基礎）」では、「パラグラフとは何か」といったことから始め、「主題文」、「支持文」、「例示」、「定義」、「比較・対照による展開」などの概念が、その用語と共に導入されることになる。

「英語（基礎）」ではパラグラフ単位の、そして「英語（中級）」（1年後期）ではエッセイ単位での構成をきちんと学ぶことができるように、英語科が推薦教科書の選定と紹介も行う。これらの授業を担当する各教員（専任・非常勤）は、推薦された教科書の中から自分に合った教科書を選ぶことができる。勿論、全てが自分の性に合わない場合には、授業の趣旨に合った他の教科書あるいは自作のプリントを使用する道も残されている。

## 6. 学術論文の正確な理解に向けて

一般的英語の読解・産出の基礎的能力を身に付けた上は、それぞれの専門分野独特の英語に習熟する必要がある。論文の用語も構成方法も分野によって異なることが多いからである。例えば solution は、ある分野では「解決（策）」で良くても、別の分野では「溶液」、また別の分野では「解」、また別の分野では「債務履行」といった具合に、異なる語義で使われているわけだから、各自の専門分野の論文を読みこなすには、「solution = 解決（策）」といった高校生的理解では不十分であることは明らかである。

但し、それぞれの分野において専門用語をどのように解釈すべきかに関しては、英語教員は非力である。自分の専門領域以外の学問には、大学の教養課程（あるいは高校）の授業以来、まともに接していないのが大学の英語教員の大半だからだ。となると、各分野の英語教育には専門分野の先

生方のご協力が欠かせないことになる。(今後、どのような連携・協力体制を築いていくかは、重要な検討課題となろう。)

しかし、専門英語に関して英語教員は何もすることがないのかというと、そうではないだろう。一般的英語と各学問分野個別の英語との間に、「学術英語」とでも称することができる類の英文が存在し、そこには、ある程度一般的に使われる表現あるいは注意すべき事項が多々存在するからである。このあたりを真剣に扱うのが、「英語（上級）」など2年生以上に開講される授業であるが、その準備は1年の時から始めることもできる。

例えば、ある文が過去時制で書かれているのか、それとも現在完了で書かれているのかは、書き手の主張を理解する上で重要な区別である。実地の読解・産出においてこの区別に注意するのは、専門分野に関わらず必要なことだろう。また、語の意味解釈のレベルでの例を挙げれば、apparentlyのような(二義に解釈できるという意味で)曖昧な(ambiguous)語が使われている場合、当該の文において意図されているのはどちらの意味であるのかを理解することは、著者の意図を正しく理解するために不可欠である。

こうした事項は、列挙していったら際限がない。細部も含めて正確に理解するには、優れた英英辞典、英和辞典を片手にじっくりと腰を据えて英文を読むことが大切である。文法に関して、英語を専門としない学生が Quirk *et al.* (1985)を手元に置いておく必要はないにしても、必要が生じたらそういった大部の文法書を紐解けるだけの基礎力をもって欲しい。

専門論文ではなく普通の英文の講読でも、大学生であればこそ注意すべき点は多々ある。例えば、He stopped the car suddenly.と Suddenly he stopped the car.を学生が同義に理解しているようなら、英語教員は、副詞の文内での位置に学生の注意を向ける必要がある。He foolishly opened the door.と He opened the door foolishly.も同義ではない。(詳細は、いずれも安井(1995)を参照。同書を読むと、一見平易な英文でも正確に読むのは如何に難しいかを痛感させられる。) grammar と a grammar の区別、history と a history の区別では、冠詞の働きに関する講義も必要であろう。There are many histories in this library.を「この図書館は歴史がある (=古い)」と解釈しているのでは、論文どころではない。コンマの有無によって著者の言いたい細部が変わってしまうこともある。それなら、コンマに関する講義も必要になってくる。

こういった事項は、やはり英語教員が行うべきことだろう。大学生の英語学習では、専門論文を読む過程でもこうした緻密な読解作業をやって欲

しい。一見易しそうな英文にも、足を掬われる「罨」が随所に散りばめられている。外国語なのだから当然のことなのだが、そのことをきちんと教えることは重要であり、そこに英語教員が果たす役割がある。そんな細部に拘っていたら、読むのに時間がかかってどうにもならないではないか、という反論もありうる。確かに時間はかかる。しかし、どうにもならないかということそうではない。外国語なのだから、そんなに簡単に読めるはずもないのである。

「木を見て森を見ず」ではいけない。そのためにパラグラフの構成を教える。しかし、「森が見えれば木が見えなくても構わない」ということにはならない。専門論文の理解にあっては、特にそれが言えるはずだ。マクロのみならずミクロも疎かにしてはいけない。英文理解においても、「神は細部に宿る」のである。

## 7. 学術論文の産出に向けて

### －平易だが自分では書けない表現の意識的収集

筆者は、卒業論文、修士論文、博士論文と節目となる論文を全て英文で書いているが、卒論を書く時が最も不安であった。当時は A4 で最低 40 枚という規定があったので、学部の 2 年生あたりから、本当に書けるのか不安で夜も眠れなかった（と言っては大袈裟か）。そこで、先輩のアドバイスに従って、専門論文を読みながら論文で使えそうな表現を一枚一枚カードに取るようにした。卒論を書き始める時点で、カードは 2,000 枚程度であった。筆者の専門は英語学（言語学）であるから、読む専門論文もその分野のものに限られるが、「先行研究をまとめる時」「先行研究の説に反論する時」「確固とした証拠のない憶測を注で述べる時」「結論を述べる時」など、各表現の機能（用途）も併せてカードに書き込むことが多かった。こうした表現には、今、振り返ってみると、英語学（言語学）以外の分野でもそのまま使えるものが多いように思う。「学術論文英語」という範疇に一括できるかもしれない。

当然のことながら、学術論文の読解は、学術論文の産出の基礎になる。これにつなげるべく、名古屋大学の英語授業で筆者が行ってきたのは、「読めば分かるが自分では書けない表現の意識的収集」の奨励である。

具体例を挙げよう。あるクラスで読んだ科学的な内容の新聞記事の一文に、There is a growing recognition today that the kind of experiences the

brain is exposed to in the first three years dramatically influence how it operates for the rest of its life. (*Chicago Tribune* 紙掲載の記事) という文があった。このような種類の文は、筆者自身もカードに採って蓄えておきたい文の一つである。もし There is a recognition that ...であれば平易で、「・・・であるとの認識がある」と訳すことができるし、書くこともできるだろう。が、その recognition に growing という修飾語句が付いている点に注意を向ける必要がある。「・・・であるとの増大しつつある認識がある」では日本語にならない。「・・・であるとの認識が高まりつつある」のように、there 構文でないかのように訳した方が良い。修飾語句が付くことで、対応する日本語の構造が変わってしまうのである。構文自体は there 構文という平易なもの。growing 自体も基本動詞 grow の-ing 形だから平易。しかし、There is a growing recognition that ...となると、日本語では直訳できず、なかなか自分で書くこともできない。修飾語句を「飾り」などと侮ってはいけないのである。更に、the rest of its life も曲者である。学生にどのように訳すかと尋ねると、決まって「人生の残り」あるいは「残りの人生」のように言う。「余生」という者もある。確かに高齢者に関する文ならそのように訳して良いだろう。が、ここで問題になっているのは3歳児である。3歳児に対してこのように訳すのは、間違いではないにせよ不自然ではないか。ここでは、「その後の人生」くらいに訳さないといけない。ポイントは、翻訳技術の問題ではない。rest の中核的意味が何かという問題である。

上の文は、平易に見えて今述べた二つの点で学ぶべき点を含んでいる。読解の授業であれば理解に困難はないので、さっと通り過ぎることもできるが、産出までも考えた場合には、このような英文が「読めば分かるが自分では書きにくい英文」であるという認識が大切になってくる。平易な語の組み合わせで内容が平易であっても、書くことはなかなか困難であるとする、こうした例に出会うたびに自分の表現カードとして収集していく必要がある。それを継続的に行っていけば、自然にこうした英文も書けるようになるはずである。

別の例を挙げる。論文でよく見掛ける Chomsky convincingly argued ... のような文である。この文からは、チョムスキーが論じている内容に加えて、筆者自身もその説に賛同していることが読み取れる。convince は基本動詞だから解釈は容易なはずだが、果たして自分で論文を書く際にこのように書けるのかと考えてみるとなかなか難しいのではないか。「チョムスキ

一が説得的に議論した」が不自然な日本語である点にも、その困難さの要因がある。こうした動詞の分詞形（現在分詞・過去分詞）に由来する -ly 副詞は多数あり、それをうまく使うと、文を簡潔に書くことができるわけである。

次は接続詞に関わる例である。..., partly / primarily / mainly because ... などは日常的な文にも現れるが、学術論文にとっても重要だろう。because によって前後の節をつなぐのは、中学で習う。が、その because に副詞を付けるとなるとどうだろう。論文では、節と節をつなぐ接続詞は重要だし、because は理由・根拠を述べる際に用いられる接続詞なので、論文においては特に重要である。この接続詞に副詞を適切に追加できるようになっていると、「理由は色々あるが、一つの理由は(partly) / 第一の理由は(primaryly) / 主な理由は(mainly)・・・」を簡潔に表現できる。一度この種の表現に出会ったら、「副詞+because」というパターンに抽象化して理解し、どのような副詞が because と共起するのかに注意を払うと良い。

2008年のアメリカ大統領選挙で、アラスカ州知事のペイリン氏が共和党の副大統領候補に選出された時の新聞記事の中で、At the time, she was a few months pregnant with her son, Trig, who was born with Down syndrome.という文を見掛けた。この平易な文にも、産出の観点から見て3つのポイントが含まれている。まずは「妊娠数ヶ月」という表現。これをさっと書ける大学生は少ない。pregnant は知っている。a few months も勿論書ける。だが、それを be a few months pregnant と書いて良いという自信はなかなか持てないのである。しかし、同様のパターンには中学1年生の時に既に出会っている。I am twelve years old.という文である。be 動詞と形容詞 old の間に twelve years という数量表現を置くことで年齢を表現することができる。その old を pregnant に置き換えただけのパターンが、be a few months pregnant 型なのだと理解すれば、「be + 数量表現 + 形容詞」というパターンに一般化できる。次のポイントは、be pregnant の後ろに with ... という前置詞句が来ている点である。with の目的語には子供が来る。ここでは「Trig という息子」が現れている。読めば迷うことなく理解される箇所だが、pregnant と with ... は意外な組み合わせのはずである。最後のポイントは、be born with ... である。be born 自体は基本的な表現である。I was born in 1980. や I was born in Nagoya. のような文は、中学1年生でも書けるだろう。しかし、with ... が来るとなると難しい。ここでは with の後に病名が来ている。「ダウン症と共に生まれた」では日本語にな

らないので、「生まれながらにしてダウン症を患っていた」とでも訳すべきか。いずれにせよ、be born も with ...も個別に見ると平易ながら、このように組み合わせるのは困難であろう。であれば、こういった「書けそうで書けない英語」に出会ったら、面倒でもメモに取っておき、いざとなったら使おうと思うことが大切になってくる。

ここに挙げたような例は、日常的な英文にも専門論文にも、いくらでも出て来る。そうした英語表現に注意を向けるか否かで、今後の英文産出能力に大きな差が生じると思われる。

新カリキュラムにおける筆者の授業では、パラグラフの構成などのマクロ的構造を理解させつつ、同時にこうしたミクロの表現にも注意を促したい。そして、それを各自が「使える表現」として覚え、使えるようにする手助けをする。各自は、専門の授業などで自分の分野の論文を読みつつ、この種の表現収集を続ける。収集した表現の数が増えていけば、論文もこなれた英語で書けるようになるだろう。英文を「意識的に」読んで、有益な表現を抽出し、パターンに抽象化し、そして「意識的に」使ってみることである。この積み重ねを数年にわたって行っても、英語論文が書けるようにならないほど、論文の英語は難しくはない。(文学作品を書くのとはわけが違うのだ。) この習慣が身に付けば、あとは放っておいても雪達磨式に表現力は高まっていくにちがいない。

## 8. コーパスの活用による「使える表現」の拡張

前節で述べたことは、学生各自に是非、実践して欲しいが、昨今は、自分で作り上げた表現の雪達磨を更に大きく膨らませる方法がある。コーパス(電子化された大規模な言語の資料)の利用である。コーパスをうまく利用することによって、論文に使える表現のストックを拡張していくことができる時代になったのだ。

例を挙げる。読書の過程で freshly caught fish という表現に出会ったとする。意味は「とれたての魚」である。しかし、この freshly という副詞を的確に使うのはなかなか難しいのではないか。そこでコーパスを用いて freshly を検索する。すると、freshly は正にここで使われているパターン「freshly + 過去分詞 + 名詞」で使われるのが、最も一般的であることが判明する。同時に、freshly squeezed orange juice 「絞ったてのオレンジ・ジュース」、freshly ground coffee 「ひきたてのコーヒー」、freshly fallen snow

「降ったばかりの雪」という具体的な表現も検索されるから、これを参考に自らこのパターンでの表現を作り出していけるようになる。更に進んで、「副詞＋過去分詞＋名詞」のパターンによる検索をすれば、newly にも同様の使い方があることを知ることができる。

学術論文において使うべき表現を知るには、一般的な英語のコーパスだけではなく、専門論文のコーパスの利用が有益である。例えば、小学館のサイトでは、科学論文のデータベース（PERC Corpus）を検索するサービスが提供されている。（残念ながら、文系の専門論文に関しては、まだ類似のサービスはない。）このコーパスは、「医学、数学、物理、化学、生物学、エレクトロニクス、通信工学、コンピュータ工学など、22分野を代表する学術雑誌から許諾を得て集められた約1,700万語の論文から成り、公開されているものの中では世界最大の科学技術英語コーパス」であり、「2009年6月末まで、世界に向けて実験的に無料公開」されている（<http://www.pressnet.tv/release/9923>）。こうしたコーパスを積極的に活用し、使える英語の幅を拡げていくべきである。

専門論文で使えるパターンとして有益なものの一つ挙げると、接続詞 as を使った表現がある。as can be seen, as is evident from ...などのパターンである（Hyland (2008)も参照）。as を含む表現は、「前にも述べた通り」「この実験結果が示している通り」「この議論から示唆されるように」など論文の各所に現れ、論文の内容を相互に関連付ける機能をもった重要なパターンである。この種の表現なしに首尾一貫した（coherentな）論文を書くことは（分野にもよるのだろうが）難しいのではないか。ならば、上の英語のコーパスから as を含む表現を網羅的に抽出し、その一覧表を手元にもって折に触れて復習し、好機を捉えて実際に使うことを旨とすれば、論文の英文の質が高まるのみならず、論文全体の論理的構成もしっかりしたものになるだろう。as 表現を的確に使うことで、議論の交通整理ができるからである。

学生個人にその余裕はないだろうが、できることなら一般的なコーパスと特殊な英語のコーパスを両方使い、どこまでが英語一般に当てはまる表現なのか、どこからが専門領域にだけ当てはまる特殊な表現なのかを見極めることも有意義である。（勿論、一口に専門領域と言っても、その広狭は様々であって、ある表現は「言語学一般」に使われるが、別の表現は「生成文法」あるいは「認知言語学」など狭い範囲でしか使われないという場合もある。）コーパスを使うことで、これまでややもすると「勘」に頼って

言われていたことに客観的な根拠（証拠）を与えることが可能となる。その際、従来の「勘」が立証されることもあるが、同時に反証されることもあるし、一部修正がなされることもある。いずれにせよ、「勘」ではなく「証拠」に裏打ちされた言語学習を行っていくことが、コーパスの出現によって可能になったと言える。コーパスを活用して、重要表現を如何にして抽出していくか、特に各学問分野別に重要な表現をどのように認定していくかの方法論の検討は、英語教育上、一つの研究領域にもなる重要なテーマなのである。

## 9. まとめにかえて

以上、本稿では、平成 21 年度から導入される新カリキュラムに絡めて、学問研究に資するための英語教育についての私見を述べた。(冒頭に述べた通り、本稿で述べたことは、新カリキュラムの枠組みに関する部分以外は、全て個人としての意見である。)

最後に一言。専門的な学術論文の理解・産出に貢献する英語教育は、大学である以上は必須である。が、そうしたことは無関係に、人生の糧となるような英文を熟読玩味することも、大学の英語教育ではあって欲しいと思うのは贅沢だろうか。そうした熟読に値する名文が、学術英語の名の下に日陰に追いやられてしまうということがあれば、それは残念なことである。実社会に出れば、忙しくてなかなか悠長なことは言っていられない。せめて大学の間くらいは、明日のパンに「役に立たないが重要な」あるいは「役に立たないからこそ重要な」英文に触れてもらいたいという気もする。が、これについて述べるのは本稿の趣旨から外れるし、既に紙面も尽きたのでやめておくことにする。またどこかで述べる機会があるかもしれない。

## 参考文献

- Hyland, Ken, 2008, "As can be seen: Lexical bundles and disciplinary variation", *English for Specific Purposes*, 27 (1): 4-21.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik, 1985, *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London/New York: Longman.
- 安井稔、1995、『納得のゆく英文解釈』開拓社。

全学教育検討WG（名古屋大学）、2008、「英語教育の改善について－国際基準の英語力を目指して－（報告書）」、1-12。